History of Kehi-jingu - at Tsuruga-machi
Echizen province -

官幣大社氣比神宮御由緒

宮幣大社気比神宮由緒

気比神宮ハ福井縣越前國敦賀郡敦賀町ニ鎮座セラル延喜式神明帳ニ名神大社ニ列シ後本國ノ一宮ト稱ス現今ハ官幣大社タリ

御祭神七座

気比大神　御名伊奢沙別命又御食津大神ト稱ス

帶中津彦命　仲哀天皇

息長帶姫命　神功皇后

以上御三座本殿ニ御鎮座

日本武命　仲哀天皇ニ御父
東殿ニ御鎮座

譽田別命　應神天皇
東北殿ニ御鎮座

豐姫命　又玉妃命ト申ス神功皇后御姉
西北殿ニ御鎮座

武内宿禰命
西殿ニ御鎮座

御鎮座由来

抑此大神ノ敦賀ニ鎮座シ給ヒシ時期ハ其年代詳カナラザレドモ夙ク上古ヨリ此地ヲ経営シ給ヒテノ稼殖漁猟及航海等ニ偉大ノ功徳ヲ現ハシ給ヒシ神ニ座スコトハ古事記日本書紀及社記ニ依リ知ル事ヲ得ベシ殊ニ仲哀天皇初メテ此地ニ行幸シ給ヒシヨリ三韓征服ニ至ル間ニ於テ最モ深キ關係ヲ有セラルヽモノアル則チ気比大神ハ古ヨリ此地ニ鎮座アリテ其御威德ノ中外ニ顯赫ナル所以ナリ

古事記中仲哀 故建内宿禰命卒其大
子神應為將禊而經歷淡海及若狭国
之時於高志前之角鹿造假宮而坐爾
坐其地伊奢沙和気大神之命見於夜
夢云以吾名欲易御子之御名爾言禱
白之恐隨命易奉亦其神詔明日之旦
應幸於濱獻易名之幣故其旦幸行于
濱之時毀鼻入鹿魚既依一浦於是御

子令白于神云於我給御食之魚故亦
稱其御名號御食津大神故於今謂気
比大神也亦其入鹿之鼻血臭故號
其浦謂血浦今謂都奴賀也
而于仲哀天皇以下五柱ノ神ヲ気比神宮ニ
合祀奉齋セラレシハ文武天皇大寶二年
(紀元千三百六十二年)ニシテ昌襲ニ敦賀ニ行幸アリシ時気
比大神ヲ拜祭セラレ皇后息長足姫命ニ勅シテ朕此国
ヲ望見スルニ海陸相通ジ異賊ヲ防クベキ地ナリ

朕八州ヲ巡見シテ後ニ宮室ヲ作リ永ク此地ニ居
ラント欲スト勅セラレ且ツ推古天皇三年（紀元千二百五十五年）
角鹿小海直小兒ヨリテ筒飯神宮ニ祭ル
べク託宜アリ當時天聽ニ奏達セレコトハ社記
ノ詳ニ傳フル所ニシテ遂ニ文武天皇大寶
二年ニ合祀ノ典ヲ擧ゲラレタルモノニシテノ同時ニ
御父日本武尊及ビ韓征討ニ御關係厚キ
皇后御子其他ヲモ奉齋セラレ有司ヲ遣ハシ
宮殿ヲ造營セシメラレシナリ

社記日足仲彦天皇御宇二年癸酉春
二月六日戊子行幸于此州建行宮坐
之此謂筒飯宮也天皇親奉幣帛於筒
飯大神拜祭乃勅皇后気長足姫尊一月
大多羅比咩尊曰朕望見此國海陸相通當防
異賊之地也朕巡見八州後欲作宮室
於此地而永居也
同記日豐御食炊屋姫天皇推古御宇三年

乙卯八月四日瑞雲靉靆都奴賀加比留
山嶺光彩耀々浦人仰瞻怪之其
夕託角鹿小海直之小兒曰朕是坐于
穴門豐浦宮御宇者也恒護皇祖衛國
家垂跡於角鹿宜以祭朕於筍飯神宮
焉後奇雲驟于韋臨山今云天筒光彩數日
而盛大也故奉遵天聽亡々
天寶宗尊祖父天皇文武詔公卿有司曰
遣使於越州角鹿令修造筍飯神宮隨
神託宜以合祭足仲彦天皇気長足姫

尊於筍飯神之宮社焉因有司等使下領
木工修理官人詣此地直遂收土木之
功奉造營筍飯神宮於是大寶三年壬
寅八月四日勅奉勸請足仲彦天皇
及皇后気長足姫尊於筍飯神宮奉拜
祭三柱大神祭日本武尊於東殿宮祭
譽田別天皇於良隅宮今謂惡社祭武内宿
禰命於西殿宮祭玉妃命皇后之御妹也於乾
隅宮今謂平殿也合七座奉鎮坐瑞籬之中
五社号気比大神宮也故以奉幣帛於

當宮西時祭典無怠慢也臨時之祭祀
勅使奉幣數而天皇代々之尊敬異他
也
氣比神宮ノ歴史ト關係
氣比神宮ノ國史ニ現ハシ仲哀天皇二年
角鹿ニ巡幸セラレ行宮ヲ興シテ駐在セラル
之ヲ筒飯宮ト稱ス而シテ皇后百官皆
之ニ從フト云フ初ナトス
社記曰天皇親奉ニ幣帛於筒飯大神ニ拜
祭乃勅ニ皇后氣長足姫尊ニ曰朕望見此

國海陸相通當防異賊之地也朕巡見
八州後欲作宮室于此地永居也且新
羅久不歸化往昔御間城入彦五十瓊
殖天皇崇神御宇意富加羅國之王子都
奴我者來着此處獻朝貢而奉仕矣至
治目入彦五十狹茅天皇垂仁御代深重
恐而都奴我令送歸彼本土任那國之
時新羅人遮之於道冠之豈非失禮於
我國乎恒欲征之也朕先可巡狩南國

汝皇后留ニ此地一祀ニ筍飯神一祈レ退ニ治三韓一
而宜聞ニ此國海路元消息一矣
之ニ依テ考フレバ仲哀天皇ノ角鹿ニ幸
セラレ而シテ気比大神ヲ祀リ三韓ヲ退治
セン事ヲ祈リ給ヒシ國史ニ其事蹟ヲ記
セザレドモ崇神天皇ナル年四道將軍ヲ遣
ハシ四方王化ニ習ハズ正朔ヲ受ケザル者ヲ教
化セシ中大彦命ヲ北陸ニ遣ハシ給フ而シテ
其六十五年任那國早リ朝貢ヲナシ垂仁
大皇二年其使者ヲ賞賜シテ國ニ歸ラシム

新羅人之ヲ道ニ遮リ其賚物ヲ奪フ二國ノ
怨ミ始メテ見時ニ起ルト記シ日本書記又
景行天皇二十五年武内宿禰ヲ北陸及
東方諸國ニ遣ハシ地形及百姓ノ消息ヲ察
セシメ四十七年日本武尊東征ノ時道ヲ八乃
ケテ吉備武彦ヲ越國ニ遣ハシ其地形ノ險
易及人民ノ順不順ヲ監察セシナラレ而シテ
仲哀天皇二年初メテ角鹿ノ行幸ト
ナリ然レバ當時三韓トノ往來ハ數代以前ヨリ

開始セラレ國史ニ記載セサル民間殊ニ九
州地方ニ其交通較頻繁ナリシヲ常知セ
ラルル而シテ敦賀ハ三韓ト交通上日本海ノ要
津ナリシコトモ知ラルルナリ加之景行天皇ハ
都ヲ大和ヨリ近江ノ志賀高穴穂宮ニ移シ
給シ成務天皇ヨリ仲哀天皇ニ至リ仲哀
天皇ハ更ニ進ンデ此敦賀ニ行宮ヲ興シ給ヘリ
當時王化ニ服セズ最モ頑強ナリシ熊襲ニシテ
進撃ハ景行天皇ノ御代再ビ反シ初メ天皇

親征シ給ヒ後ハ皇子日本武尊單身巣窟
ヲ衝キヒ首一閃遂ニ賊魁ヲ斃シ給ヒシモ纔
カニ成務天皇ノ一朝ヲ隔テ早ク既ニ仲哀天
皇ノ二年ニ於テ三度反旗ヲ擧クルモノ其
後援者ナクバ非ラス而シテ三韓ハ則チ其後
援者ナリ乃チ仲哀天皇ハ景行天皇以來
ノ御遺謨ニ從ヒ老臣武内宿禰ノ籌畫ヲ
奏シ天助ヲ祈リ陣ロニ三韓征討ノ畫策

ヲ立テ給ヒ而シテ後顧ノ患ナカラシメン為メ
親ラ南國ヲ巡狩シ給フニ当リ又熊襲ノ反
スルヲ聽キ給ヒ二三卿大夫及宮人數百徑行
ノマヽ穴門ニ急幸シ大嶽ヲ豊浦ニ移シ給
ヒ即日皇后ニ勅シテ百寮ヲ率ヰテ角鹿
ヨリ穴門ニ到ラシメ給フ依リテ皇后ハ躬ラ
筍飯大神ニ幣ヲ奉リ神教ニ隨ヒ海神
ヲ祭リ満干二珠ヲ海中ニ得テ之レヲ天皇
ニ奉リ給フ而シテ三韓征服ノ後武内宿禰

ニ命ジ太子應神ニ從ヒ角鹿筍飯大神ヲ拜
セシメ給フニ至リテ三韓征討ノ終始一貫シテ
氣比神宮ニ關係深ク且ツ太子キヲ知ルト
同時ニ文武天皇ノ朝ニ至リ仲哀天皇以下
五柱ノ神ヲ合祀奉齋セラレシ所以亦故ナ
キニ非ラザルヲ知ル
社記曰、仲哀天皇二年夏四月行ヒ幸穴
門國遠勅ニ皇后曰從ヒ筍飯浦發宜到

門依皇后奉幣于筒飯大神于時大神
告夢曰皇后泛蒼海則以五百枝賢樹
宜祭海神矣六月卯日皇后命群臣令
艤發此津（旧跡今謂幸濱一割美由喜濱也）廼取垂五百
枝榊木綿樹舳艫為和幣祭海神皇后
親彈琴以玉妃命為神主奏神樂（今若狭国
三方郡海岸謂此時皇后得如意珠於
神楽崎處是也）
海中大歡（大和七月五日到穴門豊浦津）

而奉如意珠天皇九月経營宮闕於穴
門（此謂豊浦宮）十一月勅卿大夫遣軍
卒於筑紫國征伐熊襲則降服焉
同記曰八年（仲哀）三月朔日詔皇后及
武内宿禰安曇連日往越州角鹿宜祭
筒飯大神廼皇后縱玉妃命及大臣連
等自幾内歷淡海到此津（賀）敦以音器
為神幣而躬自齋戒拜祭筒飯神時大

神託ニ玉妃命曰天皇莫患ニ寇賊敗沙不
血刃而自然歸順焉干レ爰有レ人奏曰有ニ
磯良翁能得ニ海潮盈涸之術ニ矣仍下レ令
尋ニ求之ニ則得ニ潮翁一日今國津ニ座神社是也六月卯
日皇后發ニ此津ニ還ニ筑紫橿日宮ニ而奏神
教天皇ニ矣
日本書紀神功皇后摂政十三年春二月丁
巳朔甲子命ニ武内宿禰ニ從ニ太子ニ令レ拜ニ角
鹿筍飯大神ニ

皇室ノ御崇敬

元来気比神宮ハ皇室ト深キ關係アリ
シニ仲哀天皇ハ神功皇后ト共ニ三韓征
伐ノ為メニ參拜祈請セラレ皇后三韓征
服後ハ皇太子譽田別命ヲ遣シ參
拜セシメラレ御報賽ノ御主意ヲ明ニシ
給ヒシ以來ハ殊更ニ皇室トノ御關係ハ深
厚ヲ加ヘ歴代ノ御尊崇モ唯ナラザリシナリ
聖武天皇天平二十年異賊西海ニ襲

セリ十一月十日夜数貫ノ地大ニ震動スル之ヲ
川ノ海濱ニ數千株ノ緑松忽然トシテ出現
シ白鷺樹上ニ群集白旗ノ翻カ如シ
此夜賊船悉ク覆没ス祠宮等奇瑞
ヲ天聽ニ達ス(是則チ気比松原ナリ)
宜旨ヤリ宮社ヲ造營セラル以後稱德
天皇ノ奉幣仁明天皇ノ遣唐使船舶歸
着ノ奉幣祈請後宇多天皇ノ蒙古
襲来ノ勅使奉幣。或ハ。後醍醐天皇ト

○嵯峨帝多武峰後
白河山京德
後鳥羽亀山後
醍醐天皇代々
宮殿御造營
トヤリ給ヒ白河天
白ニ表敬ニ至ル
後醍醐天皇元德
三年ノ御遷座
神宮ニ行幸調進ノ
如キ実ニ全傳ス
ヘキ事ナリ
○宮

気比神宮トリ御關係ハ特筆大書スベキ
黙ニシテ気比神宮神領地ガ後醍醐
天皇ノ御願地ニシテ延暦寺青蓮寺ガ
比神宮ノ社務タリシ事ヲモ述ベザル可
カラス
後ニ係天皇ハ藤原氏ノ權ヲ抑ヘ政權ヲ恢
復シ皇威ノ擴張ヲ謀ラレタリ當時庄園
盛ニ興リ藤原氏獨リ其所有權ヲ有シ
豪族武士ヲ用ヰテ司配セシメ益地方ニ勢力

力ヲ振フニ至レリ是ニ於テ天皇ハ庄園ヲ停廃没収シテ權門ノ勢力ヲ抑壓シ同時ニ盛ニ新勅旨田ヲ興立シテ皇室藩ノ御領地ヲ増殖セシタリ

白河天皇ハ後三條天皇ノ御意志ヲ継ギ給ヒ御譲位後ハ堀河鳥羽二天皇ノ院政ヲ行ハレ鳥羽天皇モ白河天皇ノ志ヲ継ギ崇徳近衛両天皇ノ院政ヲ行ヒ給ヒ後白河天皇ハ白河鳥羽御二代ノ志ヲ継ギテ

二條六條高倉安徳後鳥羽天皇五代ノ院政ヲ行ハル而シテ白河鳥羽後白河三上皇ノ敬神崇佛ハ國史ニ著明ナルモノニシテ諸社諸寺ニ多クノ庄園ヲ寄セラレタリ而ルニ是ヨリ先キ諸國ノ地ヲ有スル者豪族武士ノ押領ヲ防ギ所領安全ノ為ナリ方法トシテ之ヲ神社ニ寄進シ神社モ亦更ニ勢力アル皇室權門勢家ニ獻ジテ土地人民ノ安穏ヲ謀リタリ三上皇院政ヲ行ハルニ及ビ諸國ノ神社

仏寺及地方ノ豪族競テ之ヲ皇室ニ獻上シテ其所領年貢ノ安穩ヲ謀リ院ニモ務メテ之ヲ嘉納セラレ國司以下ノ亂入狼藉ヲ防ギ更ニ神領内ノ國役課役ヲモ免除セラレ一大特權ヲ土地ト成レリ茲ニ於テ皇室ハ本家トナリテ社ハ領家又ハ預所トナリテ皇室ト最モ深キ關係ヲ結ブニ至レリ而シテ気比神宮領地ハ此時鳥羽上皇ニ獻ジテ御領トナリ後白河上皇ヲ經テ八條院障子内親王ニ傳

ハリ藤原良輔ヨリ春華門院ニ春華門院ヨリ順德天皇ニ傳ハリ當時天皇御幼年ニヨリ後鳥羽上皇ノ管領セラレ所トナル然ルニ後鳥羽上皇ハ承久三年ニ討幕ノ兵ヲ擧ゲラレ其結果鎌倉幕府ノ為ナニ没收セラレ結ビ幕府ハ立ツヲ後高倉院（後堀河天皇御父）ニ獻上シ後高倉院ハ皇女安嘉門院邦子内親王ニ讓與セラレ後堀河天皇皇女室町院ヲ經テ亀山天皇ニ

傳リ後宇多院ノ管領ニ歸シ遂ニ皇太子
尊治親王即チ後醍醐天皇ノ御管領ト
サレニ至レリ

後醍醐天皇ト元弘神宮

後醍醐天皇ハ天資英聖文武天位ニ即キ
給フヤ關東幕府ノ專横ヲ憤リ政權ノ恢復ヲ
計リ國運ノ發展ヲ期シ給ヘリ而シテ討幕謀
初メ正中ニ再ビ元弘ニ失敗シ給ヒシモ毫モ屈
シ給ハズ幾クモナク四方勤王ノ義兵起リテ遂ニ建
武中興偉業ヲ成就シ給ヘリ元弘時元弘

神宮宮司大中臣越前守ガ櫻山茲俊ト共
ニ吉備津宮ニ戰死セシ事ハ著名ナラザルモ
此時天下ニ率先シテ王事ニ勤メシ忠烈ハ
其功偉大ナリトスベシ　イデヤ延元元年
元弘神宮々司一族郎黨神官僧侶ヲ
領内ノ人民マデ義烈ナル忠死ヲ遂ゲシ顛末
ヲ記セン

延元元年五月足利尊氏直義兄弟
ハ九州ヨリ大擧上洛セリ楠木正成ハ湊川ニ

戰死シ新田義貞ハ敗レテ京都ニ逃レ歸リ
天皇ハ延暦寺ニ行幸アラセラレ賊軍行在
所ヲ侵シ防戰利アラズ將士戰死セシモノ多シ
天皇一旦尊氏ノ請ヲ容レ京都ニ還幸
セラル此時諸親王ヲ四方ニ下シ給ヒ越前國ニハ
特使ヲ遣ハシ給ヒシニ氣比神宮ノ宮司神官
等ハ直ニ召ニ應ジ勤王ノ兵ヲ擧ゲタリ
太平記　主上義貞義助ヲ御前近ク
召シ御涙ヲ浮ベテ仰セラレケルハ　越前國

ハ河島維賴先立テ下サレバ國中定テ
子細アラジト覺ユル上氣比社ノ神宮等
敦賀津ニ城ヲ拵ヘテ御方仕由聞ユレバ
先彼ヘ下テ且ク兵ノ機ヲ助ケ北國ヲ打
從ヘ重テ大軍ヲ起シテ天下ノ藩屏ト
ナルベシ
コノ文ニ依リ當時事情ヲ明ニ知ルコトヲ得
ベク如何ニ氣比神宮等ガ王事ニ勤メシ義
貞ハ東宮及一宮尊良親王ヲ奉ジテ

敦賀ニ着セリ

太平記　十二月十三日義貞朝臣敦賀津ニ着給ヘバ気比彌三郎太夫氏治三百餘騎ニテ御迎ニ参シ春宮一宮總大將父子兄弟ヲ金崎城ニ奉リ自餘ノ軍勢ハ津ノ在家ニ宿ヲ點シテ長途ノ窮屈ヲ相助ケ云々

氣比宮社記　建武四年注進状

右子細者、去冬東宮並中務親王、此津

臨幸、宮司等籠ニ入金前城中時前祠官兼代忠宗資永氏治時直忠久、大宮司禰宜祝部以下神官等恐ニ兵火ニ密評議而奉ル舁ニ出大宮神輿、諸神詞御神體奉入ニ金前宮而社家老若令ニ山林退去一然金前壘没落後、只於ニ城内令焼失一給歟之旨、社家輩悲歎之處、剋然此程松津浦頭人寄ル中落城前閤夜之討、社家輩寇奉舁ニ太神宮之御輿自城中下忍

入神宮寺奉安置之而復被為籠城之
々
以上ノ二文三ノ義貞ノ敦賀ニ着セシ時ノ状態
ト氣比神宮等ガ尤モ心血ヲ濺ギテ我奉仕
スル神宮ノ御神體ヲ守護スルト同時ニ東宮
親王ヲ敬言因シ奉ルニ如何ニ忠誠ヲ抽ンデタ
リシカヲ知ルベク少兵ヲ以テ防戰スルコト二十
餘日粮食全ク盡キテ馬ヲ屠リテ食シ
刀折レ矢盡キ勢極マリテ遂ニ城ヲ陷リ敵

兵ハ城廓ヲ燒キ千古ノ恨ミヲ今猶金崎
ノ松風ニ存スル如クナレドモ氣比氏族ガ永久
以来始終一貫シテ王事ニ勤メシ光輝アル
行動ハ勿論此神宮ノ神威ニ負フ所多
ニ耀キ且ツ明治聖代ニ至リテ甚目的ノ達
セラレタリ猶茲ニ附言セザル可カラザルハ氣
比神宮ト延暦寺及高野山ノ關係ナリ
延暦寺開創ハ最澄及空海ガ共ニ
渡唐シテ佛法ヲ極メ一ハ比叡山ニ一ハ高

野ノ開ク而ヲ井ニ氣比神宮ニ參向シテ
渡唐求法ヲ祈リ同じう氣比神宮ノ靈奉
じテ各自鎮護ノ神トナシ事ナリ

社記曰　延暦四年依勅釋寂澄參向
于氣比宮祈求法矣同七年復令下向
此地而請當社第二御子神林神社之
靈鏡直奉遷于江州比叡山日吉社之
中七社是謂氣比明神焉

同記曰　延暦二十三年三月大日釋

空海詣于氣比神宮轉讀大般若
経一千卷祈渡唐求法矣又曰大同二
年六月五日爲賽礼空海下向此地奉
納大般若経於氣比神事云々弘仁七
年復詣當宮而請御子神金神社
之靈鏡奉遷于紀州高野山而爲
鎮守社是謂氣比明神焉
而ヲ氣比神宮寺ハ最モ早ク創建セラレ
奈良朝ヨリ平安朝ニ至リテ神宮ト神

宮寺盛大ヲ極メ平家物語ニ
清盛高野ヘノボリ大ヒラヲ過ギ、おしの
院ニ参られけるに、しばらくより東ヲ
見ゐたるに、はくはくなる僧ども
数多ありけるが、野山東西へ
我山は昔よりみつしらをつたへてたいそん
なし、野辺の草の露、あきのいつく
島は、西海の中にて候が、
けいの宮はさかふかれぬ、いつく島はな

きびしくあれはて、候ナドアレバ保平時
代ノ盛サリシ有様ヲモ知ルベク当時有力
ナ神社ニハ必ズ神宮ト社僧トアリテ其
社僧ノ勢力亦侮ルベカラザルモノアリ而シテ
氣比神宮ハ延暦寺ト開係深ク存続シ
テ維新以前ハ門跡ニ属シ日光田村薬師院宮ノ社寺
司配下ニアリシト伝ヘ後醍醐天皇ノ帝ニ延
暦寺ト相往来交通シテ延元掉尾ノ義
挙ヲナシモノナラン

行幸啓

明治十一年十月九日　明治天皇御巡幸
ノ時御参拝アリ　幣帛神饌料ヲ奉ル
明治　敦賀驛　御着輦懸ケ　ニ付
神社　ハ参拝被仰遣候條此段及御達
候也

明治十一年十月八日　橋本式部權助
籠手田滋賀縣令殿
明治　敦賀驛ヘ　御着輦樹ケ　ニ付

神社ヘ　御参拝被　仰出候ニ付
幣帛料　金拾六円ツヽ　七座
神饌料　金　四円ツヽ
右御奉納相成候條次第書式通祝詞案
壹葉等御廻達御達候此段及御達候也

明治十一年

十月八日式部權助橋本實梁
滋賀縣令籠手田安定殿
追テ年前十時迄ニ例祭通リ神饌相

供し奉り候様該社代理人書
を以祝詞奉読等神官へ御渡し可有
之此段申添候也
明治四十二年 月 二十一日 皇太子殿下代上大臣

地陸行啓の時参拝アラセラレ幣帛神饌
料ヲ奉献シ玉垣内に松一株ヲ御手植セラル

一、祈年祭 三月八日
一、例祭 九月四日

一、新嘗祭 十一月二十三日
以上大祭
現在境内坪数
一、九千八百三十八坪
特別保護建造物
本殿 両流造 檜皮葺
拝行四間 梁行四間半
慶長十九年（紀元二千二百七十四年）松平秀康造 五
第一鳥居 高三丈二尺六寸

桧間　二丈三尺一寸
木鑵拵造　朱膠塗
正保二年建立（紀元二千三百五十年）用材ハ御領
地佐渡国ヨリ出ダシ檜材一本ヲ以テ両
桂トス
現在神職
宮司　一人
弥宜　一人
主典　一人

大正八年参月貳拾五日　謹誌

[illegible]

[illegible]

[illegible]